村民だより
№364
平成8年2月8日
東京都小笠原村役場
小笠原村父島字西町
電話　2－3111

航空路関係特集号

村民の皆さんへ

村では、小笠原村民の永年の悲願として、航空路の開設を国や東京都に強く求めてまいりました。

これに対し、都は自然環境にとどまらず、社会環境（航空需要や建設コストの検討など）も含めた様々な調査をもとに、昨年二月、兄島への空港建設を決定しました。

しかし、最近になって兄島への空港建設は、自然環境保全の観点から環境庁や日本自然保護協会から容認できない旨の見解が示されました。

村としては、一日も早い航空路開設を望む立場から、都の決定に従い、村議会や小笠原空港新規事業化期成同盟と共に、関係各省庁や国会・都議会の各先生方に陳情を重ねてきたところであります。

先日来、環境庁の見解等を中心に新聞報道がされ、村民の皆さんの目にも触れていることかと思いますが、都の空港建設に取り組む姿勢に変わりないということも、併せて知っていただきたいと思います。

それは、空港建設が小笠原村民の生命・生活にかかわる大きな問題であり、これまで積み上げてきた成果をもとに決定されたことを、空港建設地決定の一要因である自然環境の問題だけで一朝一夕に覆すことはできないからです。

私と村議会議員七名他の陳情団は、二月五日、環境庁長官や国土庁長官、運輸省航空局長などに自分たちの願いをぶつけてまいりました。その中では、どなたも空港建設の必要性を認めて頂き、決して空港建設はダメだということではありませんでした。本当なら、村民こぞって環境庁に陳情したいところでしたが、いまだに週一回程度の船便しかない、世界でも最も遠い位置にある小笠原の不便さを痛切に感じたところであります。

環境庁の見解には遺憾ですが、今後、運輸省、環境庁、国土庁そして東京都の四者の担当課長レベルで、空港問題についての協議がされるとも聞いており、第七次空港整備五箇年計画での新規事業化採択に向けて引き続き努力して頂いております。

空港を望んでいる私たち村民としては、いたずらに新聞報道に惑わされることなく、空港建設への熱意を堅持していきたいと思います。

小笠原村長　安藤光一

二月五日の陳情にあたって、私たちは次の要望書を環境庁長官に提出しました。

要望書

小笠原諸島の地域振興につきましては日頃から多大なるご支援・ご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

さて、我々村民は、交通アクセス高速化の時代の中で、いまだに六日に一便の船で、東京・父島間が約二十九時間もかかる前時代的な状況下に置かれております。また、空港がないため、夜間の急患搬送もできないなど、村民は、心身共に大きな負担を二十七年間も強いられてきました。

そして、空港建設は、我々村民にとって、民生の安定と島の自立を図るためになくてはならないものであり、長年の悲願として、早期開設を切に要望してまいりました。

ところが、これまで何度となく、空港建設の話が出ては、財政面や自然保護の問題などで取り止めとなり、その都度、我々村民の期待は裏切られてきました。

このような状況の中で、平成三年に国の第六次空港整備五箇年計画に予定事業として採択されたことは、村民に大きな期待を抱かせる出来事でした。その後東京都の各調査結果の発表をみて、村では、兄島に小笠原空港建設を願う旨の村議会決議と村人口の九割に及ぶ署名が集まり、小笠原村民の空港建設を願う意志は強固で揺るぎないものとなりました。

東京都においても、「空港建設地を兄島とし、父島とのアクセスをロープウェイとする。」決定が行われました。

第七次空港整備五箇年計画に新規事業として採択されるよう要望活動を行ってきた我々村民にとり、自然保護を金科玉条の理由として、空港計画が潰れることは到底納得できることではありません。

ところが、今また、貴庁より、自然保護の観点から兄島空港の建設に反対する意志の表明がありました。

しかし、小笠原は我々村民が生活する島であり、一部の学者の主張だけで島の扱いが決められるものではありません。我々も、自然保護をないがしろにする考えはなく、自然との共生が必要であると考えており、自然環境に配慮した空港を望んでいます。

かつて、内閣総理大臣であった福田赳夫氏は「人命は地球より重い。」とおっしゃいました。正に名言であります。小笠原村民の命は地球より軽いから考慮の必要はないと言うのでしょうか。小笠原村民は日本国民であり、当然憲法に保証された基本的人権を確保する権利があります。そのために空港が必要なのであります。

また、コミューター機や水上飛行艇による対応を言う者もいますが、八丈島～小笠原間約八百キロメートルの距離と航空法上の安全基準を満足し定期航路として就航できる飛行機はなく、現在計画されている空港の建設が必要なのであります。また、自然環境に与える影響にも充分配慮して東京都が兄島を選択したところであります。

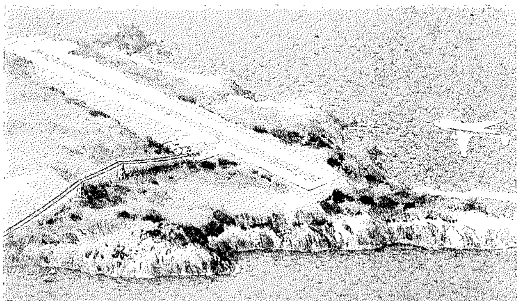
今、我々大多数の村民は、村民の暮らしを守る立場から、国の「第七次空港整備五箇年計画」での新規事業化に大きな期待を寄せております。

このような状況を踏まえ、小笠原村民の心情をご理解いただき、一日も早い航空路の開設に向けて、小笠原空港の建設に、ご理解とご支援を強く要望いたします。

平成八年二月五日

環境庁長官　岩垂寿喜男殿

小笠原村長　安藤光一
小笠原村議会議長　宮川晋
小笠原空港新規事業化期成同盟会長
打込政雄



小笠原空港完成想定図

新聞情報

建設への理解 環境庁に要望

小笠原空港で村長

小笠原空港の建設問題で、小笠原村の安藤光一村長が五日、環境庁に岩垂寿喜男長官を訪ね、「自然環境に与える影響も配慮して都が兄島を選択した。一日も早い航空路の開設のために理解してほしい」とする要望書を渡した。これに対し、岩垂長官は「空港は必要だが、兄島の貴重な自然を残したいという、世界中の人の気持ちもくみとらなければならない。環境庁と都の間でもっと議論を深めていきたい」と述べ、兄島以外での建設を望む考えを重ねて示した。

平成８年２月６日付
読売新聞

環境庁、慎重姿勢崩さず

小笠原空港の建設要望に

小笠原村の安藤光一村長は五日、小笠原諸島・兄島への空港建設に反対している環境庁を訪れ、岩垂寿喜男長官に理解を求めた。要望書の中で村側は「父島から東京へは六日に一便の船で約二十九時間もかかり、村にとって空港建設は大きな悲願。自然保護を金科玉条として空港計画がつぶれることは納得できない」とし、運輸相などにも建設促進を申し入れた。

これに対し、岩垂長官は「今は都と計画について交渉している途上。貴重な自然を残すため、配慮をいただきたい」と答え、慎重な構えを明らかにした。

平成８年２月６日付
朝日新聞

『空港建設は悲願』

小笠原村の安藤村長ら 近く国側に要請へ

都が小笠原諸島の兄島に計画している空港建設に対し、環境庁が「容認できない」との見解を伝えた問題で、小笠原村の安藤光一村長、宮川晋村議会議長らが二日都庁で記者会見し「空港建設は村民の長年の悲願。環境問題だけでは語れない」と空港の早期実現を訴えた。村長らは六日、平成八年度から始まる国の「第七次空港整備五カ年計画」に小笠原空港が新規事業採択されるよう環境庁、運輸省など関係省庁に要請を行う。

安藤村長は「船便は六日に一回しかなく、高齢者福祉の人材確保にも難航している。自衛隊にお願いしている救急患者の搬送も夜間は不可能で、助かる命も助からない。観光産業も六日休みを取って二日しか島にいられないため誘致の支障になるほか、産業も一週間に一回の出荷で不利を強いられている」と空港の必要性をアピール。

環境庁が兄島の自然環境を高く評価していることについて「村は最初から兄島への建設を要請したのではなく、都の調査で結論づけられたのが兄島だった。ほかの島では特別保護地域などの指定を外さなければならず、より考えにくい。海上も工費や運営の問題で実現性が薄い」と説明。「兄島にはターミナルビルなど人の滞在する施設は造らず、滑走路以外は付属する建築物も最小限にして環境への影響を抑えたい」と理解を求めた。

一方、青島知事は二日の定例記者会見で「都議会も全会一致で推進の方向だ。できる限り環境破壊に気を使いながら要望にこたえられるようにしたい」と空港建設を計画通り進める意向を示した。都の兄島建設案については「兄島が環境破壊や経費、安全性から見て一番合理的だと思うが、まだ本決まりではないので、良いプランがあれば加味して考えたい」と述べた。

平成８年２月４日付
東京新聞